

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年 5月 30日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20820055
研究課題名（和文）ヴェトナム中部北域におけるインド化、中国化、在地文化伝統維持に関する考古学的研究
研究課題名（英文）Archaeological study on the Indianization, Sinicization and maintenance of local cultural traditions in the northern region of the central Vietnam
研究代表者
西村 昌也（NISHIMURA MASANARI）
関西大学・文化交渉学教育研究拠点・助教
研究者番号：60469236

研究成果の概要（和文）：中部ベトナムにおいて、チャンパ時代のホアチャウ城郭遺跡の測量試掘調査を行い、その独特の構造と所属年代を明らかにした。また、各建築、城郭遺跡の踏査、出土遺物の研究を行い、9世紀頃にマレー半島経由でインドより建築技術が伝播している可能性を指摘し、それが北部ベトナムに2次的に伝わっていることを明らかにした。銅鼓の研究から、北部ベトナムで中心的に生産されていたヘーガーI式銅鼓が東南アジアに搬出され、紀元1-2世紀頃の銅鼓製作技術が、東南アジアで失蠟法やスタンプ技法により在地化する現象と、その後インド化や中国化により、大陸部東南アジアの山間部以外では銅鼓利用が途絶えることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： A land-survey project combined with test excavations revealed its specific structure and date of Hoa Chau citadel site in central Vietnam. The general survey of architectural sites and their related artifacts pointed out architectural technology originated in India possibly diffused to the central Vietnam via Malay Peninsula around the 9th century.

Based on the study of bronze drum casting technology, several discussions were proposed like the following. The Heger I-type bronze drums were casted in northern Vietnam and exported to the other parts of Southeast Asia. Adopting the stamp technique and lost-wax method led to the localization of the bronze drum casting in several regions of the Mainland Southeast Asia. The Sinicization and Indianization made an end of bronze drum-using culture except the northern mountainous area of the Mainland.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,320,000	396,000	1,716,000
2009年度	1,160,000	348,000	1,508,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,480,000	744,000	3,224,000

研究分野：人文学 B

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：中部ベトナム、インド化、中国化、在地文化伝統、考古学、瓦、銅鼓

1. 研究開始当初の背景

東南アジアの歴史・文化におけるインド化や中国化、さらには在地文化の伝統維持といった問題は、東南アジアの基層文化を理解する上で極めて重要なテーマであるが、文献資料の限界から近年あまり論じられることは少なかった。その一方で先史時代末から初期歴史時代の、考古資料は、近年激増しつつあり、今日的解釈が求められている。研究対象とする中部ベトナムは、地理的環境から、インド化と中国化、さらには在地文化伝統維持の現象が全て見られる地域であり、本研究に最適の地域である。

2. 研究の目的

東南アジアにおける政治・宗教・文化の基本構造を形成したインド化と中国化という文化変容に関して、中部ベトナムを調査地の中心に据え、紀元前後から10世紀ころまでを対象に考古学的方法から、その文化変容の過程を明らかにし、隣接域との比較参照を行う。瓦などの建築部材、土器・石器や初期貿易陶磁、装飾品、城郭プラン、銅鼓、埋葬遺跡などを研究対象として、インド化と中国化や在地文化伝統維持について分析し、埋葬様式、都城や建築、交易、物質文化の製作技術などといった視点から、その文化変化の時期・過程・受容の脈絡などについて、斉一性や差異を理解する。特にサーフィン文化のなかでの、ドンソン文化や中国系物質文化の文化的脈絡、チャンパ王国時代の中国との抗争激化時代の都城遺跡や交易遺跡の実態、銅鼓の出土脈絡と分布などに関しては、空間分布にも留意し、文化的空間議論を築くことを目的とする。

3. 研究の方法

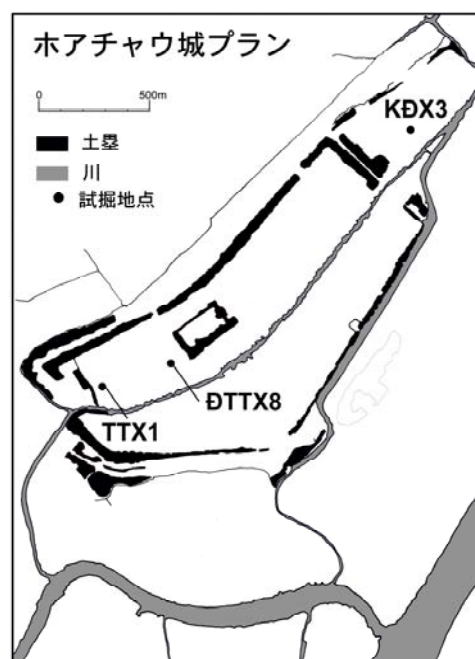
中部ベトナムのトゥアティエンフエ省、クワンナム省、ビンディン省、カインホア省を、調査対象域として、先史時代の埋葬遺跡、歴史時代の城郭遺跡（ロイ、アンタイン、ホアチャウ、ドーバン）、宗教建築遺跡、港湾遺跡（バイニット、ズオンロン、ミーソン、ミーカイン、チェンダン）などを踏査し、トゥアティエンフエ省ではホアチャウ城の測量調査（基準杭打ちとトータルステーションによる地形測量、衛星写真解析）と内郭城堡と外郭城堡内の計4地点で試掘調査を行った。出土資料に関しては、中部ベトナム出土の銅鼓資料の研究と比較のための出土銅鼓研究を北部ベトナム・タインホア省やタイン南部で行った。また、ホイアンのAn Bang遺跡のサーフィン文化所属甕棺墓資料の整理を行っ

た。歴史時代に関しては、チャンパの宗教建築や城郭遺跡出土の瓦資料の研究を行い、比較研究として、北部ベトナムのタインホア省ドンソン遺跡、ニンビン省ホアルー遺跡、ハノイ・キムラン遺跡、ハイフォン・トゥオンロン遺跡、タイ・マレー半島西岸Tung Tuk遺跡などの瓦資料を研究した。また、チャンパの宗教建築の建築工法や建築材についても踏査と資料収集を行った。

4. 研究成果

A) ホアチャウ城の研究

今研究計画のなかで、調査の一つの核になったホアチャウ城の研究結果から述べる。当城郭遺跡に関しては、チャンパ時代の遺物が出土し、その時代の文化層も確認されていたものの、後代に陳朝期の大越が占拠利用したことから、城郭建設をチャンパ時代に比定する考えは、正式には提出されていなかった。測量調査では、城郭全域に基準杭を80地点に打ち、GPS測量機で座標値を算出し、トータルステーションによる地形測量を開始した。城郭は外郭が周囲500m前後に及ぶため、全域での測量は完遂できなかったが、主城の地形認識を正確にすることができた。まず外郭土塁は周囲長が約4800mで、西端隅のコーナー土塁から時計回りに、650m長、880m長、490m長、1260m長、970m長の土塁が現存する。また、さらに西端隅の土塁の外側に650m長の土塁、西南端土塁の外側に、350m長、420m長の土塁、東南開口部前に340m長の土塁、北東端土塁の外側には260m長と120m長の土



塁が隣接する。さらにこの北東端土塁の外側土塁と直行するように Thanh Trung 川と 680m の断続的土塁が外郭隣接北東域に存在し、Thanh Trung 川と直行する水路と併せて、独立した城郭域を更生していると判断される。内郭は、北西側が 240m 長、南東側が 270m 長、北東側が 150m 長、南西側が 155m 長とほぼ長方形のプランを呈している（挿図参照）。

俯瞰すると当城堡は、城郭の中心を流れる Thanh Trung 川両岸に長方形を川の屈曲に合わせて、南東側に歪ませたような形になっている。さらに、北東側にあまり、明確ではないものの副郭とも呼べる別塁が認識できる。また、屈曲部や開口部の外側に 2 重あるいは 3 重に土塁を設けているのも、大きな特徴である。Thanh Trung 川もかなり直線的な川筋であり、川幅も一定していることから、人工水路の可能性もある。土塁は最大で周囲との比高差が 3m 前後であるが、周囲の水田面が海拔標高 1m 前後であり、非常に低温な地域に造成された城郭であることが理解できる。城郭が Tam Giang ラグーン近くに位置し、Thanh Trung 川がラグーンに注ぎ、さらには近接する Bo 川を経て、フエ平野の主流である Huong 川に合流すること、ラグーン、Thuan An 海口を経て南シナ海に接続することなどを考慮すれば、当城郭が水上交通の利便性を意識して造成されたことは間違いない。内郭城堡の過去の発掘抗の再精査を行い、土塁が大型自然石を基礎に据えた後砂質土壌を単純に盛り土しただけの単純な構造を明らかにした。これは、粘土層と瓦や磚の破片が集中する層で互層状に構成される土塁を造成する、紀元 1000 年紀の北部ベトナム（後の大越支配域）とは全く異なる工法である。この他、外郭と内郭の間の Thanh Trung 川北岸域で 3 カ所（TTX1, DTTX8, KDX3）の試掘を行った。これらは、チャンパ時代の居住文化層を確認するために行ったものであるが、10 世紀以前と考えられる居住文化層、さらには、同時期に比定可能な遺物はほとんど出土しなかった。唯一内郭に近い DTTX8 地点で、11-12 世紀の中国製の白磁や青磁類が出土し、近く（内郭か？）に 11-12 世紀の文化層があることが理解された。また TTX1 地点は、中部ベトナムで“チャムの古井戸”とされる方形井戸の脇に設けたもので、井戸の掘り込み層が確認された。出土した陶磁器は全て 13-14 世紀以降のもので、しかも最下層は池や沼地の堆積層であることが確認され、そこから 16-17 世紀の陶磁器が出土した。従って、16-17 世紀までは発掘地点周辺は水域であり、その後の居住活動で陸地が造成され、その時に井戸が敷設されたことが理解された。従って、方形井戸はチャム井戸と判断する中部ベトナムの言説は全く根拠がないことになる。表採品や収集品の調査では、チャンパ時代の

陶製神像、石製神像、石製装飾基壇、磚などが、内郭を中心に確認された。

さらに 1997 年の考古学院の内郭発掘調査による資料の再研究を行い、その遺物群に越州窯などの 9 世紀に比定できる越州窯などの中国陶磁を確認した。

このようなホアチャウ城での調査結果を通じて、当城郭はチャンパ時代（恐らく 8-9 世紀）に建設されたもので、可能性としてはその後の時代まで居住する人間集団の入れ替わり（チャンパからベトナム）はあれど、ほぼ連続的に利用されていた可能性が高い。また、当城郭は、通常の都城のように郭内に大人口を居住させるような性格のものではないことが明らかになった。おそらく水上交通に依拠した軍事拠点あるいは交易拠点が、その利用目的の主であろう。そして、陳朝期以降、大越集団による城郭再利用は認められるものの、城郭自体は大きく形態を変えていない可能性が高く、その後の村落居住時に内郭周辺（現 Thanh Trung 集落）の高レベル化が盛り土などにより進行したと判断した。

城郭構造に関しては、長方形の城郭構造は、チャキウ、アンタインなどにもみられ、それらも内郭構造を持つ可能性があることから、時期を越えた地域的特徴である可能性が高い。

B) 中部ベトナム建築遺跡と関連遺物の研究

次に中部ベトナムの歴史時代（チャンパ：2 世紀以降）の研究成果について述べる。

建築遺跡や関係遺物の研究では以下のようなことを明らかにした。ミーカイン遺跡の塔建築は 8 世紀前後のものと考えられているが、ここには漢字が成形時に主面に刻まれた磚が使われている。この銘文は読解が困難であるが、少なくとも塔建築に漢字を理解する技術者あるいは工人が含まれていたことになる。当時の碑文はサンスクリット系チャム文字による碑刻しか確認されておらず、支所が語る王名などもサンスクリット系であるが、それとは別個に漢字による表記あるいはその文化を持つ中国系人間が社会に存在したことになる。これはビンディンのアンタイン城表採の唐系斜面型瓦当、交趾郡や九真郡、さらには呉（三国）とのつながりを示すチャキウ、ミーソン、コールイなど出土の人面瓦当などと並んで、チャンパの文化における中国文化要素として非常に興味深い。しかし、こうした瓦・磚において中国的要素は 9-10 世紀以降には存在しない可能性が高く、その後は、インド亜大陸起源の尖状平板瓦に全面的に取って代わった可能性が高い。ビンディン省とクワンナム省の各遺跡資料の研究から、この尖状平板瓦は、クワンナムのドンズオン、アンフー、ミーソンの資料などが 9-11 世紀に位置づけられ、これらはチャンパ城での初期の尖状平板瓦となり、それ以前の屋根

あるいは屋根瓦形態と全く異なることが想像される。そしてこれらは技術形態的に、マレー半島のトゥントック遺跡出土資料に近く、同時期のクメールなどの瓦と比べ全く異質なものである。従って、このインド起源の瓦は、マレー半島経由でチャンパに 10 世までには伝播したと推察した。そして 10 世紀には北部ベトナムのホアルー都城で使用が開始され、11 世紀にはタンロン都城を初めとする北部ベトナムの各建築遺跡で、形状を大きく変えて普遍化し、現在まで使われ続けていることが明らかとなった。

また、タンロンを中心とする北部ベトナムとチャンパの各建築遺跡の建築技術や建築材の共通性や類似性も明らかとなった。前述の尖状平板瓦以外に、菩提樹形装飾斗瓦はチャンパと北部ベトナムにみられる。蓮華文はチャンパの石製装飾のそれと、北部ベトナム李朝の蓮華文瓦当のモチーフが、非常によく似ている。さらには、チャンパの建築遺跡の場合、道や壁の基礎に砂利が用いられており、これは、北部ベトナムでタンロンや寺院遺跡で確認された道路状遺構の基礎と類似する。さらに、ファッティック、トゥオンロン遺跡など北部の仏教寺院遺跡にある塔建築がチャンパのそれと基本構造が似ていることも明らかになってきており、こうした現象は、10 世紀にベトナムが独立した後、チャンパの建築技術や文化を積極的に取り入れたことを理解しなければ、説明できない。しかもこうした北部ベトナムとチャンパの技術・文化的交流は 13-14 世紀まで続いていると考えられる。これは、ベトナムのチャンパ文化の影響によるチャンパ化、あるいは 2 次的インド化とも捉えうる事象である。中国から独立を果たしたベトナムが、その文化的振り子を大きく変動させた証拠となる。現在、基本的にチャンパは 10 世紀以降ベトナムの南進により両者が激しい攻防を行った歴史的記録のみが注目されているが、今後はこうした両地域間の文化的影響関係も念頭において、歴史を読み解くべきであろう。

C) 先史時代末期の銅鼓と埋葬文化で考える文化変容

最後に、中部ベトナムの後期先史時代の研究成果について述べておく。

中部ベトナムの鉄器時代は甕棺墓を基準とするサーフィン文化であるが、この文化領域の中にも、北部ベトナム・ドンソン文化の中心的器物である銅鼓が出土していることは昔からよく知られていた。しかし、これらの銅鼓群が、ドンソン文化の他の器物と共に、どのように受容されたのか、あるいはドンソン文化人が中部ベトナムに植民し、地元での模倣生産などを行っていたかどうか等の問題が議論となっていた。

筆者はビンディン省、クワンガイ省、カインホア省、トゥアティエンフエ省の銅鼓の観察研究を行い、さらに北部ベトナムで銅鼓の出土中心地であるタインホア、マレー半島やタイ湾沿岸部やジャワ島の資料と比較研究を通じて、以下の結論を得た。

まず、北部ベトナムの東南アジア以外に分布する銅鼓は、分割鋳型法による鋳造で、ほとんど北部ベトナム製と結論せざるを得ないことである。これは形態や紋様の分類学的研究から近いことが議論されていた。しかし、新たに今回以下の論点を加えることができた。一つは鋳造技術（湯口や鋳造時や模型製作時の痕跡）において、北部ベトナム出土鼓と他東南アジア出土鼓間に鋳造技術上全く違いがないことを明らかにした。これは分割鋳型法による鋳造湯口を鼓面上に複数設ける方法、さらには、鼓面裏面にみられる模型製作痕などが共通すること。二つめは、中部ベトナムから東北タイ、東部タイ、マレー半島北域にそれぞれ、紀元前 1-紀元 2 世紀頃に失蠟法鋳造の銅鼓が出現し、紋様に地域性が見られるようになり、これらは明らかにそれぞれの在地での製作と判断される。そして、この在地製作の銅鼓と共通する紋様構成をもつ分割鋳型法製作の銅鼓は全く存在しないことである。

以上より紀元 1-2 世紀頃までに東南アジア各地に分布する銅鼓は、北部ベトナムで製作され、搬出されたものと判断されたが、さらに問題となるのは搬出の担い手である。中部から南部ベトナムにかけて、銅鼓を甕棺葬の棺として使用している例が確認されており、こうした甕棺葬伝統は中部のサーフィン文化の伝統を受け継ぐものと考えられる。しかも、タイのカオサムケオなど銅鼓とサーフィン型球状耳飾り両方が出土している遺跡もある。また、今回はクワンガイ省リーソン遺跡で、銅鼓の把手片が出土しているのも確認できた。従って、銅鼓の搬出担い手をサーフィン文化あるいはその継承者と考えるのはさほど無理がないと考える。

また、銅鼓製作の中心地と考えられるタインホア省では紀元 1 世紀あるいは 2 世紀前半に、スタンプ技法による施文と鋳造湯口を鼓面ではなく合范面に設置する新しい鋳造技術で製作する銅鼓がタインホア省山間部に出現し、やがてこの技術が広西などの II 式銅鼓製作技術基盤となることを明らかにした。これは、当時の漢帝国が北部ベトナムで実行支配域化を進める時期に相当し、物質文化面でもドンソン文化的なものが放棄され、中国化が進行する時に相当している。つまり銅鼓に代表されるドンソン文化は、その中心地タインホア省や紅河平原南域などの平野部から、山間部へ避難し、やがてはそれが、広西側に伝わっていることになる。これはほぼ同

時期の中部ベトナムの状況とも似ている。中部から南部ベトナムにおいても、同時期の銅鼓出土は海岸部よりは、むしろ内陸部であり、銅鼓の利用文化が内陸部を中心とした領域であったと理解できる。

また、ヘーガーI式銅鼓が東南アジア各地域に搬出された最後の時期は紀元2世紀と考えられ、それはビンディン省やラオス、東北タイに分布しており、搬出ルートも海岸線沿いあるいは海岸ルートというより、むしろ内陸ルートの可能性が高く、これは海岸ルートを握っていた政体あるいは人間集団が、銅鼓利用自体に興味を持たないか、あるいは銅鼓利用文化自体を拒否する文化を有しており、結果的にそれまでとは異なる内陸ルートでの搬出をとったのではないかと推察する。当然紀元2世紀は、北部ベトナムでは龍編を中心とする中国支配体制が堅固になった時代であり、中部ベトナムは日南郡南端で林邑国が勃興し、さらにメコン河平原では扶南が隆盛化する時代である。こうした中国やインドの国家思想やシステムを取り入れて、政治社会システムを大きく変えた地域以外に、内陸部にはドンソン文化伝統あるいは在地文化伝統を引き継ぐ社会・文化が、インド化、中国化した地域に隣接して短期間ではあるかもしれないが、存在したと考えられる。こうした文化は、その後、現在少数民族ちととなって平野部とは異なる文化領域を形成するチュオンソン山地社会の一つの基盤になっている可能性もあるだろう。

そのように考えれば、他の東南アジアで、おそらくタイ北部からラオス・東北タイの一部を除いて、銅鼓の利用伝統が紀元2世紀以降見られなくなる現象を、インド化による政治・文化・宗教思想の変容と考えることに問題はないと思われる。

従って、物質文化を基準にした場合、北部ベトナムの中国化、さらには中部ベトナムの中国化とインド化、南部ベトナムやそれ以外の東南アジア大陸部や島嶼部西半はインド化を進めたと理解できるが、この文化変容現象は、紀元1-2世紀にほぼ同時期に起きたことであり、それは中国の北部東南アジア進出とインド洋からの交易文化や政治文化の東進が在地文化と絡まりながら引き起こされた総合的な文化変容であったと理解できる。そして、こうした高文化を受容した地域が、その後、各地域での国家形成を進め、受容しなかった地域は、山間地などで在地伝統文化を強く保つ形で、現在の山地民族社会につながる基盤を形成したと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線

〔雑誌論文〕(計4件)

- ①西村昌也・宮原健吾他考古学調査からみたホアチャウ城の性格(ベトナム語)『研究と発展』(印刷中) 査読有
- ②西村昌也, 鑄造技術からみたヘーガーI式鼓に関する考察『南海をめぐる考古学』, 同成社(印刷中) 査読有
- ③西村昌也, The roof-tiles in the Later period of Champa, 東アジア文化交渉研究 3号, 2010年, pp433-457. 査読有
- ④西村昌也, 考古学調査からみたホアチャウ城の初歩認識『周辺集落と外部からみたフエノ歴史と文化』(ベトナム語), 2010年, pp166-174 査読無

〔学会発表〕(計5件)

- ①西村昌也/Nguyen Giang HaiヘーガーI式銅鼓の湯口について(ベトナム語)ベトナム考古学の新発見 2009年会議(於ベトナム社会科学アカデミー) 2009年9月25日
- ②西村昌也・宮原健吾他, ホアチャウ城に関する考古学調査の結果概報(ベトナム語)ベトナム考古学の新発見 2009年会議(於ベトナム社会科学アカデミー) 2009年9月24日
- ③西村昌也・宮原健吾他ホアチャウ城に関する考古学調査からの初歩認識, 『シンポジウム: フエの歴史と文化: 周辺集落と外部からの視点』 2009年9月4日(於フエ科学大学)
- ④西村昌也, The bronze drums in the Sa Huynh and its related cultural region and cultural context. サーフイン文化国際記念シンポジウム, 2009年7月25日(於ベトナム・クアンガイ省文化情報局)
- ⑤西村昌也 Quang Thanh社 Hoa Chau城遺跡の調査初歩報告 東南アジア学会例会 2009年6月13日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村昌也 (Nishimura Masanari)
関西大学・文化交渉学教育研究拠点・助教
研究者番号: 60469236